派遣報告書

山西　弘朗　Hiroaki YAMANISHI（博士後期課程）	
派遣先	韓国外国語大学校（韓国）
専門分野	文化人類学
研究テーマ	東アジアにおける日系新宗教の文化人類学的研究
派遣期間	2012.8.1-2012.9.30（2ヶ月）
本学側指導教員	三尾　裕子
派遣先指導教員	Prof. Yae Nakamura（韓国外国語大学校）

派遣の概要

8月1日に韓国到着後、まず派遣先指導教員である中村八重先生にお会いするため韓国外国語大学校に向かい、韓国における調査研究の進め方や韓国社会の現状、および韓国学術界の研究動向などについてご教示いただいた。韓国外国語大学校日本研究所で助手をしている大学院生の朴さんが現地での調査のコーディネートや研究のサポートをつとめてくださることになった。

韓国における日系新宗教のうち戦前から戦後にかけて布教を継続してきた天理教を調査対象とし、まずは現状と歴史的経緯を把握するため、8月4日から12日にかけて金海市にある天理教韓国伝道庁に滞在し、聞き取り調査および参与観察を行った。幸運にも伝道庁滞在中は韓国人信者を対象とした教育プログラムである「修養会」の期間中であり、その教育方法や受講者の状況について観察することができた。さらに韓国における日系宗教研究で著名な宗教社会学者である東西大学校の李元範先生とお会いし、韓国の天理教に関する具体的な調査の進め方についてご教示いただいた。

8月14日はソウル市内の天理教教会二ヶ所において教会長や教会長家族に対して聞き取り調査を行い、さらに天理教儀式の参与観察を行った。17日は釜山市にある東西大学日本研究所を訪問し李元範先生をたずね、これまで先生が進めてこられた研究の成果や韓国社会における天理教の動向や受け止められ方についてご教示いただいた。18日は再び伝道庁を訪れ、韓国内の教会長や信者が参加する月次祭（毎月一度定めた日に行う祭典）を観察した。その後、車で一時間半ほどのところにある天理教教会を訪問し、教会長やその教会の事務所で働く青年に対して聞き取り調査を行うとともに、そこで宿泊させていただいて朝夕の「おつとめ」という宗教儀式の参与観察を行った。

8月21日に韓国外国語大学校日本研究所所長の権景愛先生、指導教員である中村先生とお会いしてこれまでの調査内容について報告。今後の進め方についてご教示いただく。22日、韓国外国語大学校中国語学科の林大根先生と食事をとりながら日韓関係、および台湾と韓国におけるポストコロニアル状況、特に対日観についていろいろとご教示いただいた。23日、ソウルにある大韓天理教本部を訪問し、本部の責任者である「教統」とお会いし、現在の状況および韓国伝道庁（韓国教団）との差異について聞き取り調査を行い、本部施設を見学した。

9月に入っても先月と同様、韓国における天理教をはじめとする宗教の状況を把握するために関

係施設を訪問し、聞き取り調査と参与観察を行うとともに、関係資料の収集につとめた。

まず9月3日に韓国外国語大学校で韓国におけるグローバル化や文化政策について研究している文化人類学者である朴尚美教授とお会いし、韓国におけるグローバリゼーションとそれにともなう文化変容や文化財をめぐる人々の運動や政策、さらに文化人類学的宗教研究の進め方などについてご教示いただいた。5日は同じく韓国外国語大学でカルチュラル・スタディの観点から韓国の近代化やポストコロニアル状況を研究していらっしゃるチョ・ヨンハン先生とお会いして、韓国のポストコロニアル状況、特に大衆文化、マスメディアにおける日本の描かれ方や宗教状況などについてこれまでの研究成果をご教示いただいた。。9日はソウル市内にある天理教教会の月次祭に参加した。特に9月は天理教の秋季霊祭（教会関係者の魂を慰める儀礼）も行われ、土着化した祖先（先人）祭祀の方法を観察できた。10日はソウル市内の別の天理教教会の月次祭に参加し儀式を観察するとともに、教会長夫妻から韓国における天理教の状況などをご教示いただいた。特に教会長は日本留学経験があり日本における天理教の状況にも詳しいため、日本と韓国における天理教の差異について聞き取り調査を行った。

13日は韓国外国語大学台湾研究センター主催の講演会が開かれ、台湾中央研究院民族学研究所研究員のAllen Chun氏による台湾におけるエスニックアイデンティティと脱植民地化についての講演を拝聴した。講演後の質疑応答では韓国の研究者や学生から韓国と台湾におけるポストコロニアル状況、たとえば対日観の両地域での差異についての質問が相次ぎ、議論が展開された。14日は大韓天理教本部において月次祭が行われ所属する韓国内の教会長や信者が集って行われた。さらに月次祭に引き続いて秋季霊祭も行われ土着化されたユニークな儀礼を観察することができた。また、済州島にある教会の教会長とお会いすることができ、済州島における天理教をはじめとする宗教状況についてご教示いただいた。

韓国における伝統宗教についても理解を深めるため9月22日に韓国仏教の一つである天台宗の総本山である救仁寺の主催する一泊二日のテンプル・ステイに外国人や韓国人参加者にまじって参加し、韓国における仏教について宗教実践を通じて理解を深めた。

その他、韓国外国語大学校図書館などにおいて文献調査を行い、戦前の朝鮮半島における天理教の活動、および戦後の韓国における天理教について資料収集や複写などを行った。また天理教関係者から資料を提供していただいただいたり、参考資料を購入したりして文献資料の収集にもつとめた。

研究成果

天理教韓国伝道庁、大韓天理教本部をはじめ、天理教教会6ヶ所などを訪問し、天理教関係者10名以上、さらに仏教関係者3名から聞き取り調査を行った。さらに韓国における調査研究について韓国の研究者6名からご助言やご教示をいただいた。

今回の聞き取り調査および参与観察を通して、日系新宗教が戦後の韓国社会において布教を展開していく際に、日本国内や日本人移民社会内の布教活動では課題として顕在化、客体化しなかった「日本性」というものが、さまざまな教義や儀礼の中で表出してくることが明らかになった。

戦後、脱植民地化を通じて韓国のナショナリズムに支えられて形成された民族的自尊心は日系新宗教が内包する「日本性」と緊張関係に生じさせる可能性があり、そのような教団組織の形成や維持運営における文化的摩擦が、それに対する韓国人教会長や信者の態度や対応の差異

を生じさせ分派する危険性を常にはらんでいることがわかった。

しかもそのような「日本性」をめぐる課題は、組織内において日本の教団本部に対してや教会間の宗教的権威をめぐる力関係に大きく影響されることはもちろん、教会長や信者個人それぞれの信仰経験と対日観に大きく関わっている。たとえば日本留学や日本語の習得、日本人との交流など個々人の経験が、宗教教義や儀礼における「日本性」という課題に対する態度や対応を多様化させるため、韓国のポストコロニアル状況における日系新宗教の受け止められ方や布教活動を多様化、複雑化させているという状況が聞き取り調査や参与観察によって浮かび上がった。

今後の課題

今回の研究調査で明らかとなった状況、つまり韓国において日系新宗教が内包する教義や儀礼における「日本性」がどのように形成され、顕在化、客体化し、それに対して日本文化や日本の教団本部の内情に詳しい現地の宗教エリートたちが実際に布教活動を進める中でどのような対応策をとっているのか、また日本の教団本部がこのような状況に対して海外布教方針をどのように策定、実践しているかについて、同じく日本の植民地支配を受けた台湾の状況と比較することで、東アジアにおける日系新宗教の受容に関して植民地支配という特異な歴史的経緯を経験した両地域の植民地支配と戦後の脱植民地化というポストコロニアル状況の異同を宗教の側面から現地の人々の観点に基づいてより深く描き出すことができると考えられる。なお、今回の調査研究で得られた成果は「宗教と社会」学会の研究大会で口頭発表を行ったうえで学会誌に投稿するとともに、派遣の受入機関となっていただいた韓国外国語大学校日本研究所が発行する学術誌『日本研究』に投稿する予定であり、さらに研究を進めていきたいと考えている。